

天光物語

完

此書乃...

壬子年拾遺記

二





字分名集(文治十五年出版) 皇朝

孫年之揭

清和原夫在古生村家紋丸二引取

五千石 在古石原大川端

最上國書助

(右加印陸瑞式花書子也)



K289  
No

Handwritten text on the right edge of the page.

Handwritten text in the middle of the right page.

義先公物序

家上以家年某述七代仕以与以源公弟義俊公

手有家老仲之系山にて松根信吉与公儀の所好と

持山北邊在處古相継近城と与源義と与中上と

と与与源規と与与信吉与誠吉と与義と与元元与源

身与与源と与与長後治國源の在義傳知と与源と与

上使家老中一教仕源公弟と守之の戸と与再之

と与源と与山北邊在處古相継近城と与











義光公物語上巻目録

一 一しむらむいふまのき

一 志ろむ十部討取き

一 二がまらちれき

一 登つぬまれ城あらしのき

一 志雲城用取き

一 かしこも山合戦のき

一 三川の子生害乃き

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the title '義光公物語上巻目録'.



一 山崎の城平定の変

一 勝安房の能くも常力の変

一 息屋形ゆりあつた変

一 十の里原合戦ゆりあつた変

一 山崎の城平定の変

一 勝安房の能くも常力の変

一 息屋形ゆりあつた変

一 十の里原合戦ゆりあつた変



義守逝去の事

一 孝子と父との定程とあるは徳和流武家

一 出陣按察使將軍源理定君頼公延文

元年丙申八月廿二日山崎の城に入

陣ありて康暦元年二月八日逝去

史記に存終より康暦元年逝去

我々義光公才一歳に河内父義守公

道山と名湯とよふ湯治女野日吉











披見するに 刻家と出好者ありて是状に之を  
物り有り何大し之十帝と討せんと思召臣不  
氏家尾活きと後従ふて尾活身方ふと尾  
尸をありいし程を隣あり和をより依て由乃  
五語之自はりしに徳人困る上り之を我  
義光を方く和後を及厚念に心持するに  
向後ふよ守世とくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくく

百合するにありて程ひ申さるる物り有り寸許在  
つゝくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
中く末ふけく敵討殺成ひ上り尾活身方ふと  
の程ひと申紙と存小義光と念和後を及と  
とひ出陣とありて又敵討するに示さるるに又尾  
ふり有り物あり後もくくくくくくくくくく  
と和後を及くくくくくくくくくくくくく  
よ使者の由ありとくくくくくくくくくく



終小十守山形の城、其のゆるゆるし信之ます。  
尾行さしつお後かて義を公の彼とひひ。  
和山海軍い舟と、多十守を、對面也。  
國の仁室と和入、又、其の彼程、定知、少、言、家。  
茶、高、と、是、能、け、重、方、に、は、く、紙、を、ぬ、れ、お、茶、  
の、高、と、信、ひ、石、目、と、是、今、も、あ、ら、う、の、は、し、也、も、  
う、ち、れ、は、也、く、條、と、條、行、ゆ、ま、り、後、も、  
も、後、村、の、山、形、い、ま、り、見、信、ふ、に、面、能、也、氣、也、

い、お、外、と、い、お、家、の、み、お、残、前、後、と、也、を、り、也、  
成、物、院、に、西、の、檀、と、り、り、古、新、念、元、也、  
并、一、門、元、也、信、信、の、是、外、也、  
身、出、入、一、と、名、に、國、章、也、  
と、ん、と、り、十、守、也、  
り、れ、は、と、也、  
み、て、也、  
和、義、也、











交りしを舟中北より出陣也初十年切し出  
くわ火しきりしれい義光公家よりくわき  
振舞い行かんしあつたふじつたる後七下有  
ぬし民利しきる者ぬれん徳のよし方乃  
ち初もちあふはやくしと進陣けむ之を  
度この和後ともあつた利かぬあつと御  
出するも余奇怪之徳と行かんしとて進軍  
初しはさしきる初十年も義光公に感銘了

あれ早く新賊と引取りぬ初軍も妙瑞義  
くわあつ初佐良人くわしと七の志者さつ  
しきりしとたしきりしと初十年とて  
急進行し経の徳也初志あり後徳しと  
出く後しとけしとんと合人けしと  
七方と初と合しと徳は初とあつと  
徳徳川とけしと引退しと初十年とて  
く外も初とけしと後と初と初と初と



上々をさるとるをりしと押ありし一統軍勢の也  
和身いともていふありあつとちていふありしを  
そはねをてしとていふありしにねをていふ  
のそしとていふありしに川端よ陸とを流  
しぬと空流し一義老と一神とを言たりしは  
ぞい出らねしとていふありし建方の先原の  
遠近をとり川の端よ舟を流さんといふれ流  
すといふことなる流川よ百信とありし中一和

あつては難付られいかなく押原ちえ氏と  
尾張守小舟とていふありし明日和略とていふ  
和十舟とていふありしとていふありしは川と打  
紙備ありしとていふありし和十舟出りしとていふあり  
味方乃先原左右の芝原小後絶とていふありしと  
捨人伝至合我神とていふありし先原後原ありし  
ありしとていふありし和十舟とていふありし  
向ふ入る若武老ありし例とていふありし徳軍と



先達曰くみみん古也也其財より并に  
物り或拾獲し終絶とすしよとて可  
有と云くは臣民を以て法廷を以て  
結末の月が日以て感ふことすし  
つとま或拾く撰ゆられ者も(季)名  
ひ若は尾すすすすすすすすすす  
臣民に對してとおもふことすし  
緒若すすすすすすすすすすすす

陳小機中大勢(す)割て入るるに  
亦何れも去り終小恙るたす  
し筋もすすすすすすすすすす  
さすれすすすすすすすすすす  
云甲斐れくほとんすすすすす  
物十等とすすすすすすすすす  
柄も七拾とすすすすすすすす  
先すすすすすすすすすすす







押取しし義光公のほすし属とてしるる軍と  
年一押取しし義光公のほすし属とてしるる軍と  
攻の身しるるし山室かた島林を家定之の強きの  
射も難くも弱くしてしるるし山室かた島林を家定之の強きの  
ひるるし山室かた島林を家定之の強きの  
しるるし山室かた島林を家定之の強きの  
先しし山室かた島林を家定之の強きの  
先しし山室かた島林を家定之の強きの

しし山室かた島林を家定之の強きの  
のしるるし山室かた島林を家定之の強きの  
義光公のほすし属とてしるる軍と  
しし山室かた島林を家定之の強きの  
大威の強し山室かた島林を家定之の強きの  
のしるるし山室かた島林を家定之の強きの  
しし山室かた島林を家定之の強きの  
しし山室かた島林を家定之の強きの



出候もとま方の者在た所の身よりいふ体  
れきしぬめりれしと終し申念候ことなふ  
ら候よりいひしより字よりあまのちよにお身  
候指しし口にナにナ候とる不候もぬして下  
首福ち切しぬくゆふのさ終し申人氏と大  
尾張守に付しゆ申し年也とて人りり候  
と首古候ふんてなとやとにお候とて身も  
母武者乃備ふんと候しゆしるのむれし終ん

まよひしよしは色もぬぬ業動ふと付候  
し付分ははしと身年ぬとて自身の中と  
ぬとちねと身よりして十年にえと候候  
しぬ年方のさ及とてあしと付れりりて  
よちぬは身の時白しとていひしは候  
こし候様とれとぬつてや預王に我ふ候  
しと權王とてと我ひとぬとては權王  
と不討とやぬとぬ義貞將とてと氏の



陸路より千入りて此を破してさる氏より千入り  
とせしよる氏より合戦はるひはひし  
かぬに官軍のとり軍をとりしことあり  
くらんやまふらむ甲斐よりさぶ郡の武士  
若し直徳のつははらうらへしはひの御座  
備えやうは義をたもむ自をたもむひん  
ふり控りてすししちるもむ智とまたる  
くともあつてもと投てけひひりうを破り

ちるくもとありし自戦はるは直徳  
とありし小姓出陣に正人知をたもむ  
て取れひまに御してさるのとりて  
もむむし首をとらむもむししむ  
内のおいしむとむししむしむし  
徳川氏宗家の戦とありし自の合戦  
二度にひしむしむしむしむしむし  
ふのれしむしむしむしむしむしむし























一、く位より安否の余りて方力之を  
しる者世にあらんともタリテ勢友を招き  
何れ能くあらんかと思辨して之を  
しりてあらんかと思辨して之を  
さすらんかと思辨して之を  
る世の終極のそとより一子よ  
らるる世にあらんかと思辨して之を  
しりてあらんかと思辨して之を  
さすらんかと思辨して之を

あひは憐易しくありて  
よれども後帝と云ふは  
中より後帝と云ふは  
と能くあらんかと思辨して之を  
もすらんかと思辨して之を  
考へて之をあらんかと思辨して之を  
七帝行傳生ら平拾七帝と云ふは  
ちよと云ふは安否の余りて方力之を















書し七巻をくろくして一巻の書方止  
と雖も一巻のくろく後々々の目もあらず政  
とて申すれども今日も陽のあつるに  
未明ならず多政しくして使然軍へ  
去後よと堂もれ能くもを  
かしりたり好政も申す  
此ののせりといふ人  
却ては力のあつる所へ  
方より押すも其の  
かしりたり好政も申す  
入るるもその  
たつに申す  
能く身も  
兵衛早建退治  
我勇しく申す  
乃ちの死と



柏木内合我々

一  
多上上の山と云ふは満ちて云ふは是れ義  
光公の伯母年と云ふは在日江中を役と云  
ふは佐毛の伯母の事と云ふは丹波守の事  
義西日氏神と云ふは神の事と集めて云ふは  
かへともなはぬ義光の事と云ふは我々  
上の山と云ふは伯母の事と云ふは是れ義  
光公の伯母年と云ふは在日江中を役と云  
ふは佐毛の伯母の事と云ふは丹波守の事  
義西日氏神と云ふは神の事と集めて云ふは

の思案の義光の妹婿と云ふは是れ義  
光公の伯母年と云ふは在日江中を役と云  
ふは佐毛の伯母の事と云ふは丹波守の事  
義西日氏神と云ふは神の事と集めて云ふは  
かへともなはぬ義光の事と云ふは我々  
上の山と云ふは伯母の事と云ふは是れ義  
光公の伯母年と云ふは在日江中を役と云  
ふは佐毛の伯母の事と云ふは丹波守の事  
義西日氏神と云ふは神の事と集めて云ふは































先づ自に多うて教へ給へし御上流一宮  
より御宗と申し給へし御宗一宮より  
御宗一宮より御宗一宮より御宗一宮  
御宗一宮より御宗一宮より御宗一宮

後鳥羽の御宗一宮

一 皇統に崩すに公卿を在りて皇統に崩すに  
皇統に崩すに公卿を在りて皇統に崩すに  
皇統に崩すに公卿を在りて皇統に崩すに  
皇統に崩すに公卿を在りて皇統に崩すに

方のおもひに御宗一宮より御宗一宮  
山入御宗一宮より御宗一宮より御宗一宮  
の御宗一宮より御宗一宮より御宗一宮  
御宗一宮より御宗一宮より御宗一宮  
御宗一宮より御宗一宮より御宗一宮  
御宗一宮より御宗一宮より御宗一宮  
御宗一宮より御宗一宮より御宗一宮  
御宗一宮より御宗一宮より御宗一宮











物はたれて侍りし所へ可仕る所へ  
多勢の引合一様とて流るる事よ  
目もくはくして流るる事よ  
代りて至るとん控めと遊ばし  
のへに西浴敷とて入射る事よ  
しやちんは内流伊西なる才  
さしちんは急角の同言に  
而却るる所を道中より  
さしちんは急角の同言に

あしちんは急角の同言に  
以て義老公とて平に  
紙片のこころを  
はしちんは急角の同言に  
さしちんは急角の同言に  
さしちんは急角の同言に  
さしちんは急角の同言に  
さしちんは急角の同言に  
さしちんは急角の同言に  
さしちんは急角の同言に







































一 初て義之公亦感其曰くもなかりし事

あるはゆふのくさくさの末に結成しよと

願主依りし由の指し示しに在りて義之公

のはちかたつた供とてなるといふ形に仕

可なりとてはもろれた由指し示すに

は指し示すに依りし由の指し示すに

の形に仕しよとてなるといふ形に仕

義之の感其はけいしきとてなるといふ

と指し示すに依りし由の指し示すに

義之の感其はけいしきとてなるといふ

と指し示すに依りし由の指し示すに

義之の感其はけいしきとてなるといふ

と指し示すに依りし由の指し示すに

義之の感其はけいしきとてなるといふ

と指し示すに依りし由の指し示すに

義之の感其はけいしきとてなるといふ























































































とて此のうねりたるを討御し置るべし  
くしんたるを討御し置るべし  
は何ともおぼしむるに中とあるを西に  
取之置長持れを御事し置るべし  
物しんたるに首と投け置るべし  
とて御事し置るべし  
よおるうにた方の平座に御事し置る  
とて御事し置るべし

とて御事し置るべし  
ゆきたるを御事し置るべし  
とて御事し置るべし  
ゆきたるを御事し置るべし  
とて御事し置るべし  
ゆきたるを御事し置るべし  
とて御事し置るべし  
ゆきたるを御事し置るべし  
とて御事し置るべし  
ゆきたるを御事し置るべし







悟之教一修也

宣文抄卷之四十一

義光公物類三卷



義光公為天下之目録

從之夜多務公使者之事

家康公具列所遺之書

近國之諸士為如佛山形地集之事

烟管居所之事

上之山合我之事

從以卷之字之公如傳之事

長名堂合我之事



一 去律勞引退之事

一 下治為除系之事

一 衣內退治之事

一 他理柔版生之官之事

一 於天常尔之何之事

一 義老云遊云之事

一 官之移相色形之事

一 一

一 假在夜系務公使官之事

一 豐信大園秀云以遊云之役而治於病

一 為企強運為白之役其門字務公之亦之役

一 物更京務公由更致下之官之役之講也

一 也又口一 役相之知云云少程之好使也

一 之安秀和云之身之役之役之役之役

一 義老云之役為一使之國尔之役之役

一 之役之役之役之役之役之役之役



△地所多しなる事ありて出づる信之為云  
しと云ふは猶ほ流理之指是也別布地  
あるに村ありて所被也越ありて集はは  
流ありて義を云ふ字ありて事ありて  
んりて事ありて知ありて事ありて  
其下の事ありて事ありて事ありて  
事ありて事ありて事ありて事ありて  
事ありて事ありて事ありて事ありて

△地所多しなる事ありて出づる信之為云  
しと云ふは猶ほ流理之指是也別布地  
あるに村ありて所被也越ありて集はは  
流ありて義を云ふ字ありて事ありて  
んりて事ありて知ありて事ありて  
其下の事ありて事ありて事ありて  
事ありて事ありて事ありて事ありて  
事ありて事ありて事ありて事ありて



















より多印りし所を公と在り門のは位を位と在るに  
し所らも水がまの玉と感しわくし位を中書  
に遊覧のいふ事記し能事有るしとある也  
ふきふし古様のいふ位修し趣ふ事あるに  
は白の白なるを中しありし事也これい  
る事也云々云々云々後云々新し好むんを  
ゆりしに位とて苦しんぬしとて能事  
とありしれり所しんぬしとて苦しんぬしとて能事

いふ事遊覧のいふ事記し能事有るしとある也  
ふきふし古様のいふ位修し趣ふ事あるに  
は白の白なるを中しありし事也これい  
る事也云々云々云々後云々新し好むんを  
ゆりしに位とて苦しんぬしとて能事  
とありしれり所しんぬしとて苦しんぬしとて能事  
又いふ事位なる所らも水がまの玉と感しわくし位を中書  
に遊覧のいふ事記し能事有るしとある也  
ふきふし古様のいふ位修し趣ふ事あるに  
は白の白なるを中しありし事也これい  
る事也云々云々云々後云々新し好むんを  
ゆりしに位とて苦しんぬしとて能事  
とありしれり所しんぬしとて苦しんぬしとて能事











妻と丈夫の抄入 小文子と今床小はら  
方々之常務と運作をいふ多し行從也  
不に高田治の少備依全五進之里西之懸  
方より往來し一應に依之方何れか  
由之早馬方より今より先山山列之候  
富より山山一依之今床言方海軍初宗  
山形少好義之と云はれ付 徳藏今床秀  
康云之山山山しひひ 泉原云方也云之  
のと好ひなり

世國越將の御書山形に集給事

一 去程に取康云方より御書七月十五日山形  
上州東澤見一山方より万事を御書に  
取方山形小好中と云はれ之候に  
山形に在御書と云はれ之候に



日下可流果之東軍之停後之能之に毎之念と  
手成口より記入しつゝ

家應公父子之押付は進養ありし事  
依云、東光公之命と相傳軍停後と  
逐けし度は此の如し數の進養あり  
ある事ありは相傳公少形比集りし事  
昔の事ありは南都信長寺より入封田集  
并抄の事ありは并法ありは并抄の事あり

而回傳せし事ありし事ありは東光公  
以并ありは仁如保ありは百法ありは酒法  
刑科百拾人由鐵保ありは拾余人岩屋右是  
岩拾人部合ありは并抄十人ありは并抄あり  
くことありは軍停後ありは先之由ありは  
起傳ありは并抄ありは義光公ありは并抄あり  
日利ありは并抄ありは起傳ありは并抄あり  
西家ありは并抄ありは并抄ありは并抄あり











































向ふ所詠たれは、  
後麻の事り首とあらはれ、  
三山飛下してゆり、  
首殺二百の給ふ事、  
怪しむ心、  
五城の攻む事、  
後山守公如磐の事

一

去程の細い事、  
初らん事、  
仙卷の事、  
物理事、  
計別事、  
三原島事、  
あぢ百女、  
之射而















并ぬらむを來に城井ちふ力と好そ昔も下  
勢ハとのらぬ軍に力と爲一徳高徳を自  
らいつや可也越ねつらんといふは  
信を事とすもいふは  
物も少くし程の程に善きと好徳を  
之所由の徳人を辨しき事と辨し  
物ふと事ふ付て出付いふも  
少くし程の徳人の善きと好徳を

そとといふはあつらん無徳也徳を  
しとす事辨しよと辨し事と辨し  
あつらん徳人の徳人を辨し  
若くは徳人の徳人を辨し  
あつらん徳人の徳人を辨し  
徳人の徳人を辨し  
徳人の徳人を辨し  
徳人の徳人を辨し  
徳人の徳人を辨し











是存世と云々して多物くして心平氣和  
身も力も有りて布の厚く片しと云

上野山合戦之事

一 上野山少将里見武光守を破敗し不敵に  
上陸中ノ軍軍奉行等任事するも少信と云々  
山形にお預り民部足利一助の子数多  
流成し等し之節山形にお預りて草薙  
石之守而山の口人お預りて卒して所  
存

りし九月十七日お預りて足利祐村逃  
乞所飛流七守お預りてお預りて  
張ゆりしは保をたけ保をたけと云  
川と云りて山形と云りて山形と云  
勢をいへは逃取しんと信をたけと云  
是と云りてお預りてお預りてお預り  
竹末と云りてお預りてお預りてお預り  
れは御預りして山形にお預りてお預り











くく 移と申し 八遠ひの 忠をまて 時移は  
我より され在 敵に 今朝の 多くの 旗西と 越来  
く 徳軍 法に ねきり こそと 未と ぶりこ  
分すも 立居し 一 陣中 とも あり ぬれぬ  
自に あり ば 破りし 色に ぬれぬ あり あり あり  
子守に あり あり あり あり あり あり あり あり  
枯木と あり あり あり あり あり あり あり あり  
いふ あり あり あり あり あり あり あり あり

さうさう あり あり あり あり あり あり あり あり  
我 悟 候と あり あり あり あり あり あり あり あり  
さうさう あり あり あり あり あり あり あり あり  
いふ あり あり あり あり あり あり あり あり  
大石 枯木と あり あり あり あり あり あり あり あり  
く 軍 あり あり あり あり あり あり あり あり  
を 接 切し あり あり あり あり あり あり あり あり  
山 あり あり あり あり あり あり あり あり







西と信ますしけりそら半ゆ中なる方の前なる千身法  
幸とともぞしとく 獲人台と成出目の下よりんか  
ろしぬらひひ角とては(まるとんし)并流  
これとらりあしとくしとらふふに物と成るる  
城井と成也にぬと世程切先と持(すてぬ)に  
あしうにぬとまぬ(ま)村のふと成るる  
石行らたにぬと世程(す)持(す)り  
しと成るるまらふと成るる今我成るる

山城守にさる人(す)まらと(す)ぬ水(す)り  
信て成る軍の信とらるる(す)持(す)り  
の(す)と(す)る(す)り(す)り(す)り(す)り(す)り  
え(す)り(す)り(す)り(す)り(す)り(す)り(す)り  
と(す)り(す)り(す)り(す)り(す)り(す)り(す)り  
れ(す)り(す)り(す)り(す)り(す)り(す)り(す)り  
み(す)り(す)り(す)り(す)り(す)り(す)り(す)り  
七(す)り(す)り(す)り(す)り(す)り(す)り(す)り















































新に後よりなる何事か徒然り男も女も  
庄内退治之事

一  
まはるる庄内退治の事とて男法も女も  
度指名甲斐守等及て将として地内つて  
くく申渡さるる毎也哉あまればは狂言  
る村に居る事とて村長の事とて何事  
まはるる里見源兵衛も御後守御合を  
勢の千代人の飛と打立てて月山に御と哉

侍とて其のおもひ事候一河内とて其  
ゆふそん酒田の城とて夜更りたに甘兵  
花伝田代に色物あはるるに其事  
あまふとて其事とてあまふとて其事  
の先存の事とて其事とて其事とて其事  
そこ一とて其事とて其事とて其事  
浪高一とて其事とて其事とて其事  
もれくもけ一とて其事とて其事とて其事























活久しと交う或切の信くそ万部忠に  
守てぬ一歳とたり。し事らさるるの  
結人うしやとたり。山別古世とて。古  
之を信しあて号し。古世信あて定め  
同懐ふよを傷部とて七の及ふ事  
守と信あて人死すは誠代し。一  
と後信あて人昔と信あて人死すは  
し。月より百の信あて人死すは誠代し。  
少玉梅は手相回我守身と代り。一  
とあはひし。

物理実をけし言と事

一  
猶子何ん其義親家と信あて人死すは  
去と信人可親の信あて義志と信  
あてと信と感と事し。あり信人可親  
信と事信と事と事と事と事と事と事  
信と事と事と事と事と事と事と事と事































國之傳之入之如之如之義之公之所服也  
馬之年之之緒之感——

於天堂原沙馬橋之年

一 慶長十年四月十日  
己卯年五月十日  
又於井之志述之曰以馬之爲之  
不殘可之也之也之也之也之也之也  
誠至也之也之也之也之也之也之也

於天堂原沙馬橋之年  
己卯年五月十日  
又於井之志述之曰以馬之爲之  
不殘可之也之也之也之也之也之也  
誠至也之也之也之也之也之也之也











とわす神女に伝出さるの目有しはのち  
とすしをいしつりし物とすねて深心  
入らふ知しつりし物とすねて深心  
しつりし物とすねて深心

義孝公御まゝ事

一 慶長拾八年の冬、義孝公は例に  
よりしつりし物とすねて深心  
とすねて深心

家康公に御意を申し渡りし事  
御自是よりはは候と相おれは  
丁度して口年九月経河  
本より上野舟上候しつりし  
西縁迄を物としつりし物  
御意に合はせしめしつりし  
御意に合はせしめしつりし  
御意に合はせしめしつりし



之六 江戸の事と云ふ事 其の事も亦自見

可仕しむる事ありし 勿論此状も亦違ふ事

今春より高き所ありし 爲之に生る事あり

一々之事ありし 終年此事ありし事あり

御書之相細事ありし 故に事ありし事あり

方之御事ありし 押付上は事ありし事あり

長江事ありし 御事ありし事ありし事あり

江戸 家書之御事ありし 御事ありし事あり

近き事ありし 御事ありし事ありし事あり

多し 御事ありし 御事ありし事ありし事あり

懐金報事ありし 御事ありし事ありし事あり

御事ありし 御事ありし 御事ありし事あり

山形より事ありし 御事ありし事ありし事あり

并御事ありし 御事ありし 御事ありし事あり

十八日 御事ありし 御事ありし 御事ありし事あり

御事ありし 御事ありし 御事ありし事あり



口十と本名馬山最河内と内とは流すは  
ありしう書子に勝と一統年とありしと  
光輝寺とて切替いしとありしと利根寺と  
ありしと一とありしと一とありしと  
可把寺とありしと一とありしと  
く夏達書泉の縁地ありしとありしと  
とて室の先と後千とありしと南とありしと  
院佛とありしと一とありしと一とありしと

一人感ししとありしとありしと

室上統将和形言とありしと

長巻とありしとありしと

國とありしとありしとありしとありしと  
ありしとありしとありしとありしと

式万七石 清水大森を備後

式万石 大山内徳正殿

式万石 上野山兵部を備後

式万九石と百石 山野田を備後



一 是方六子武子石

指是甲安身反

一 是方五子石

不城是希身反

一 是方石

志村作是身反

一 是方石

城上純作身反

一 是方七子石

里見或於身反

一 是方七子石

氏處左近身反

一 武百石

此字古法能登身反

一 武百石

下 射馬身反

一 是方九子石

空河江肥身反

一 是方三子石

布根源右身反

一 是方子石

難地截身反

一 八子石

白石恒示身反

一 是方石

能得兵身反

一 八子石

小園日向身反

一 同

河口又吾身反

一 同

中山之吾身反

*（Red vertical text: 此石在... 白石... 能得兵... 小園... 河口... 中山...）*

*（Red vertical text: 長...*



一 因

一 因

一 因

一 因

一 因

一 因

一 因

一 因

一 因

一 因

一 因

一 因

一 因

一 因

一 因

一 因

新園因按守辰

里見熱海守辰

長所武部辰

飯田恆介守辰

成澤道忠辰

安食大和守辰

赤坂伴五守辰

奥村吉隆守辰

小園按律守辰

日野好監守辰

日野惠右守辰

大之原重馬守辰

志之原孝房守辰

高橋重信守辰

松平致和守辰

小泉親好守辰

若木

休花

百部注  
与守辰  
能守辰  
以守辰  
以守辰

高橋守辰

一 因

奥村吉隆守辰



一 武子三石

一 武子石

一 同

一 武子石

一 同

一 武子石

一 武子石

一 同

一 武子石

一 武子石

一 武子石

一 武子石

一 同

一 同

一 同

一 同

里見市之石

和国武子石

里見市之石

神保石

長尾石

羽衣石

長尾石

奇肉石

終末石

日野石

修善寺石

志村石

中村石

濱月石

日野石

赤根石



一 同

一 同

一 同

一 石

一 同

一 同

一 同

一 同

一 石 兵部 兵部

一 和 田 九 兵 部

一 小 幅 按 摩 兵 部

一 橫 田 兵 部

一 里 見 掃 部 兵 部

一 武 之 兵 部

一 高 橋 兵 部

一 於 本 兵 部

一 同

一 同

一 武 石

一 同

一 同

一 同

一 同

一 同

一 石 垣 河 兵 部

一 小 國 兵 部

一 牛 崎 野 兵 部

一 本 間 兵 部

一 水 原 兵 部

一 志 坂 兵 部

一 戶 井 兵 部

一 原 兵 部



一 同

井上牛之助殿

一 式

下 吳恒身殿

一 同

下 勅入齋殿

一 式

下 女三殿

一 式

末戸周防殿

一 同

長口權成

一 同

仔細子堂物

一 同

成沢惠治帝

一 之三

不詳

小泉權成

一 之百

口

根坂左近

一 之百

口

菰森左近

一 之

口

東田大膳

一 同

口

指名 主水

一 同

成島左衛門

石見 左衛門

一 同

口

濃谷 周防

一 之百

志村 守直

色友 但馬















